

- 江原素六とその周辺 68
江原素六の恩人深津摂津守
- 特別展「写真にみる沼津のあゆみ」開催中
- 催し物参加者募集
- 館外展示のおしらせ

二〇二三年七月

沼津市 史料館通信 明治

通巻154号



『沼津合同新聞』昭和一六年二月六日号 当館蔵

昭和一五年（一九四〇）時点で沼津で発行されていた二つの地方紙『東静日日新聞』と『沼津新聞』とが合併してできたのが『沼津合同新聞』だった。しかし、同一六年（一九四二）二月には、戦時下の政府による一県一紙の方針にもとづき、静岡県内の他の五紙と合併して『静岡新聞』が誕生するに至り、わずかな期間で廃刊となった。

特別展「写真にみる沼津のあゆみ」開催中



大正12年(1923)7月1日、沼津市は静岡県内では静岡市、浜松市に次ぐ3番目、全国では89番目の市として誕生し、その後、周辺の町村との合併を重ね、平成17年(2005)年に現在の市域となり、今年は市制施行100周年の年を迎えました。この記念すべき年に当館では特別展「写真にみる沼津のあゆみ」を開催します。本展では当館がこれまで収集してきた古写真等を中心に、幕末から明治、大正、昭和、平成、令和の沼津のあゆみをふりかえります。

記念写真集を販売します

市制100周年記念事業の一環として、幕末・明治から現代までの「沼津」のあゆみをふりかえる写真集を刊行しました。

A4判 布張り上製本 オールカラー 217頁
1冊 3,000円

ミュージアムグッズも販売中

ポストカード 50種 1枚100円
クリアファイル 3種 1枚300円

歴史講演会を行います

演題：「村と町と市と
町村合併にみる近代沼津のあゆみ」

講師：松沢裕作氏（慶應義塾大学経済学部教授）

日時：令和5年9月9日(土)
13時開場 14時開演

定員：60人(応募者多数の場合は抽選)

参加料：無料

申込：電話または直接

ギャラリートークを行います

展示会場で学芸員が解説します。

日時：①8月12日(土) ②9月9日(土)
いずれも11時から

参加費：無料(但し観覧料が必要です)

申込み：①8月8日(火) ③9月5日(火)
いずれも9時から

電話または直接お申込みください

定員：各回15名(先着順)

催しもの参加者募集

謎解き！沼津歴史探偵
～100年前の沼津へタイムスリップ～

日時：7月22日(土)～8月24日(日)

内容：謎解きを通して沼津市が誕生した頃のことについて学びます

対象：どなたでも

参加費：不要(観覧料は必要 市内小中学生は無料)
参加希望の方は受付でお申し出ください

申込み：不要

平和を考える戦争史跡めぐり

日時：8月10日(木)、11日(金・祝) 雨天中止 9時～12時

内容：海軍技術研究所跡、御成橋被弾跡などをバスで回ります。

対象：市内在住・在学の小学4～6年生とその保護者

定員：各回10組20人(申込多数の場合は抽選)

参加費：保険料 1人24円、資料代(希望者) 1冊300円

持ち物：筆記用具、飲み物、タオル、帽子

申込み：希望日時、参加者の氏名(ふりがな)、参加当日の年齢(子は学校名、学年)、性別、住所、連絡先を明記して直接、電話、FAX、メールで。
7月30日(日)16時30分(必着)

高校生のための1日学芸員体験講座

日時：8月3日(木) 10時～12時

内容：学芸員のお仕事解説、バックヤードの見学、資料の取扱い体験 など

対象：市内在住もしくは市内の高校に通う高校生

定員：10名(先着順)

参加費：無料

持ち物：筆記用具 飲み物 など

申込み：7月25日(火) 9時から電話にて

古文書解読入門講座

日時：9月の毎週土曜日 9時30分～11時30分 全5回

内容：古文書に初めて触れる初心者を対象に、親しみやすい郷土の史料をテキストとして、自分の手で歴史をひもとく楽しさを味わいながら、くずし字を読めるよう学習する

定員：30名(先着順)

参加費：無料

持ち物：筆記用具

申込み：8月22日(火) 9時から電話または直接

沼津市明治史料館通信
第154号

令和5年7月31日

編集・発行 沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL055-923-3335
FAX055-925-3018
印刷 みどり美術印刷

館外展示のおしらせ

館外展示 第20回明治史料館 館蔵資料展
「沼津まちなか古写真展」

内容：沼津市制100周年記念特別展「写真にみる沼津のあゆみ」にあわせ、明治時代以降の沼津のまちなかの様子を古写真や地図で紹介いたします。展示場所が大手町という事で「まちなか」の写真を中心に展示します。

日時：令和5年9月1日(金)～9月28日(木)

場所：沼津信用金庫本店ストリートギャラリー
*沼津市大手町5丁目6-16

沼津停車場 明治40年(1907)

沼津停車場通全景 大正時代

江原素六の恩人深津撰津守

家庭の貧困にあえいでいた青少年時代の江原素六が、私塾や幕府の教育機関で学ぶことができ、後に立身していくチャンスをつかんだ背後には、親族や知人たちが寄せられた親切があった。そのことは彼自身が後年たびたび語り、書き残している。そういつた恩人の一人に、深津撰津守という旗本がいた。

深津撰津守(喜三郎・弥左衛門)は、子弟に「四書五経の復習」をしてくれるよう江原に依頼し、その金銭的報酬として「学資」を与えたばかりか、「読みたい本は何でも貸してやる」と、蔵書を開放してくれたという(『急がば廻れ』)。さらに、江原を講武所に入学させ、砲術を学ばせてくれたともいい、それは安政六年(一八五九)十二月、江原が満年齢で一七歳の時のことだったとされる(『日本帝国国会議員正伝』)。そもそも深津家での「家庭教師」の仕事を紹介したのは、江原の姻戚浅野従兵衛であり、さらに斎藤弥九郎に剣術、佐久間象山に蘭学を学ぶようになったのは深津の周旋によるともいう(『同方会大会御演説速記』)。また、江原家が火災で焼失した際、新築費用を援助してくれたことがあったほか、江原が文久元年(一八六一)に講武所砲術世話心得に採用されたのも、深津の推挙だったとする文献もある(結城礼一郎『江原素六先生伝』)。

江原が幕府陸軍士官として出世していつても

公文書館所蔵)に、「歩兵頭深津撰津守惣領深津弥寿太郎陸軍士官学校寄宿伝習修行被仰付候義」云々と出てくる「弥寿太郎」が保太郎のことであろう。彼はフランス軍事顧問团によつて江戸に設立された三兵士官学校の生徒に選抜されたらしい。静岡藩での保太郎は、アメリカへの留学生に選抜され、明治二年(一八六九)十一月、藩費で渡米した(『明治初期静岡県史料』第四卷)。ところが彼は、明治五年(一八七二)九月一五日、アメリカで病死した(『幕末明治海外渡航者総覧』第二卷)。諱は正敦といたらしい(『駿遠へ移住した徳川家臣団』第五編)。

江原が残した文書の中に、「仰山」という人物から「素六様」に宛てた三月一日付の書簡が一通ある(沼津市明治史料館所蔵)。「米国ヨンカルス倅方之書状過日到着、此老書御届申上候様倅より申越候間、則差上候、御落掌可被下候、昨年米国江御出之節ハ色々御厚情相成申候由有難云々とあり、息子がアメリカで江原の世話になったことに感謝し、手紙を日本に送ってきたのでお届けするということである。このアメリカにいる息子こそ、深津保太郎のことであり、仰山はその父親の名である。江原が十三大藩視察団の一員として渡米したのは明治四年(一八七一)のことなので、この書簡は明治五年のもの、保太郎が亡くなる半年前のものであることがわかる。

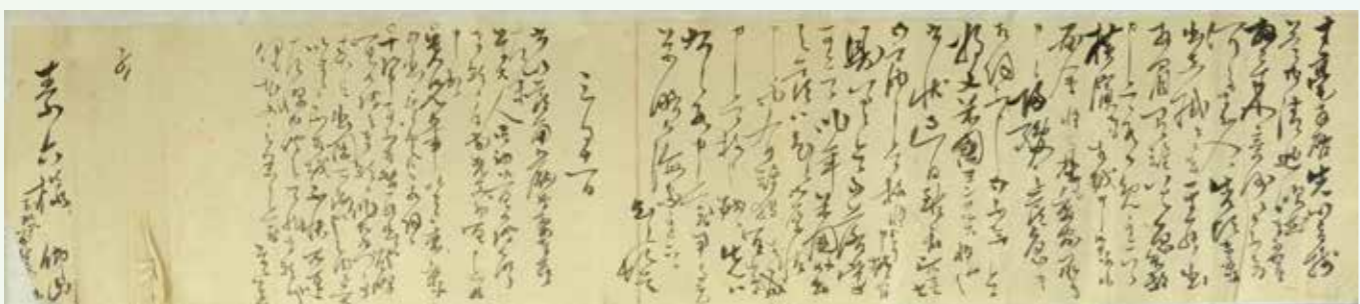
深津仰山が保太郎の父であることは、勝海舟の日記・明治四年八月一九日条に「深津仰山、米国同人倅之事申聞」(『勝海舟関係資料 海舟日記(五)』)とあることから裏付けられる。そうなること、撰津守と仰山、保太郎の関係はどうなるのであろうか。

深津との交遊は続いたようで、出陣した京都では連隊長として上官にあたる深津に対し、江戸引き揚げの時期が来ても残留の希望を申し出たという。また江戸無血開城の直前には、恭順論と抗戦論の間で苦悩したすえ、自害することを決心し、「最も恩故になつた」深津のもとを訪れ、「何となく此の世の暇乞をした」のだという。ただし、深津は江原が死を決意していることに気付かなかったらしい。

さて、その深津撰津守という人物であるが、どのような経歴の人だったのだろうか。幕府の人事記録など、諸史料・文献によれば以下のような履歴である。

撰津守という受領名を名乗ったのは慶応期、最初は喜三郎といい、文久期には弥左衛門と称した。江原は喜三郎時代から知遇を得ていたわけであり、彼の回顧談に喜三郎・弥左衛門・撰津守という呼び名がすべて出てくるのはそのためであろう。深津家は武蔵・上総・撰津に知行地を持つ七〇〇石の旗本で、安政期には書院番をつとめ、三番町に屋敷を構えていた(『諸向地面取調書』)。講武所支配取締役(文久二年五月)、講武所頭取(三年一月)、御持小筒組之頭並(九月)、歩兵頭並(元治元年一〇月)、歩兵頭(慶応三年五月)、御役御免・勤仕並寄合(四年一月)といった具合に役職を歴任した(『柳営補任』)。

江原の自伝の他の箇所には、深津の名前を出していないものの、以下のような逸話が記されている。少年時代、剣術の免許を受けるためには金がかかったが、「親切な人」「大層、好きな人」がその金を出してくれた。その助力もあって学問もできた。その人が亡くなった後、その人の息子は「可成の



江原素六あて深津仰山書簡
当館蔵

たぶん、撰津守の子が仰山、仰山の子が保太郎ということであろう。撰津守の惣領が「弥寿太郎」(保太郎)になっていたのは、何らかの理由で仰山は家督を継ぐことなく、孫の保太郎が撰津守の跡継ぎ(嫡孫承祖)になつていったと考えられる。江原宛の仰山書簡には、「手前老父初宜申上度申出候」との一節あることから、まだ健在だった「老父」撰津守が仰山といっしよに静岡に住んでいたらしいことがわかる。深津仰山は、諱を正邦とい

年輩」で、かつ「大層酒飲み」だったため、飲み過ぎが原因で死んでしまった。その家では、「江原さんはお祖父さんが世話をしたのである、お祖父さんのお蔭で人になつたのである」と常々言っていた。そして、貧乏になつてしまったその家では、「江原さんに此の子供を一人なり、二人なり何うか世話をして貰ひたい」と、江原を頼るようになった。江原の側でも「どうか助けてい」と、恩になつた人の子孫に報いようと考えたという(『急がば廻れ』)。この家が深津家のことであることは間違いないだろう。

維新後の移住先静岡で深津撰津守が死去したのは、明治六年(一八七三)一月一〇日。八〇歳だった。戒名は深心院殿戒禪日唱居士、静岡市・蓮永寺に残る墓石には「旦齋深津翁墓」(俗名深津弥左衛門藤原正保 行年八十歳)と彫られている(『千代田誌』)。諱が正保だったことがわかる。江原が一七歳だった時、すでに六六歳だったことになる。



深津撰津守の墓
静岡市・蓮永寺

近くには、明治2年に3歳で亡くなった旦齋深津翁墓と彫られている。鋼吉の墓も立孫(仰山の三男)。

静岡藩士としての深津家は、保太郎が当主であり、移住者の名簿『駿藩各所分配姓名録』にはその名が掲載されている。慶応期の幕府の記録(国立

静岡病院院務取扱、静岡県では第四大区副戸長をつとめ、上京後は東京府に出仕し、十一等出仕(明治七年一月)、権中属(八年六月)などを歴任、その間、徴兵検査取扱、戸籍掛戸籍科担任、学務課などで仕事をし、明治十三年(一八八〇)七月、七等属を免じられたことがわかっている(東京都公文書館所蔵文書)。亡くなったのは明治十五年(一八八二)四月二三日、五二歳だった(『駿遠へ移住した徳川家臣団』第五編)。仰山は春早庵閑鷲と号し、淘宮術に入門した事実も知られる(拙稿「淘宮術と明治の旧幕臣群像」『沼津市博物館紀要』43)。江原が言う、大酒飲みで家計が苦しかったというのは仰山のことになる。保太郎の弟と考えられる、仰山の息子深津正弼(安政六年三月二四日生まれ)は、明治六年時点では静岡西草深町に住み、その後は、日本銀行創立事務所雇(明治一五年)、日本銀行三等書記、鹿鳴館内東京倶楽部書記(一八年)、内閣備(一三年)といった経歴をたどった(国立公文書館所蔵文書)。

江原は別の回想録の中で、「私の極く恩になつた深津弥左衛門と云ふ者が居る、其子は今大蔵大臣の秘書官になつて居る」(『大家立志談 江原素六君』『中学世界』第四卷第一号、一九〇一年)云々と述べているが、「其子」というのが正弼のことである。先述の述懐に「子供を一人なり、二人なり」とあったように、後年に至るまで撰津守の恩に報いるため、江原は、保太郎のアメリカ留学や正弼の修学・就職についても何らかの支援を続けたのかもしれない。「明治十年度書状往復」と題された江原の住所録にも、深津正弼とその兵庫県の住所が記載されている。